Osaka University Knowledge Archive

Title	台湾の高等教育における日本語学習者の学習動機 : 社会的文脈と自己形成との関連から
Author(s)	羅, 暁勤
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46694
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【7】

氏　　名	羅（ラ）　曉勤（ギョウキン）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学位記番号	第　20460　号
学位授与年月日	平成18年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	**台湾の高等教育における日本語学習者の学習動機－社会的文脈と自己形成との関連から－**
論文審査委員	（主査） 教　授　沖田　知子 （副査） 教　授　西口　光一　　助教授　難波　康治

論文内容の要旨

外国語習得の成功を予測する要因の１つは学習動機といわれている。従来の研究においては、学習動機は個人の内面的な心理プロセスとされているが、主にアンケートや実験的な調査手法を用いて、学習の達成度と動機に影響する要因の相関関係に着目することが多く、学習者のダイナミックで流動的な学習動機を十分には捉えていないと考えられる。本研究では、従来の先行研究の問題点を踏まえた上で、台湾の高等教育における日本語学習者の学習動機の変化及び学習行動との関係を、質的手法の１つであるライフストーリー手法を用い、新しい視点－社会的文脈・他者の存在・自己形成－から明らかにしようとした。

論文の構成として、第１章の序論では、なぜ筆者が学習動機に興味を持ったのか、また、台湾における日本語学習の現状と学習者の学習動機などに対して、どのような問題意識を持っているのか、そして、研究課題とは何かについて述べる。第２章は、研究の枠組について、先行研究の概観や問題点、そして、学習動機を捉えるための新しい視点－社会的文脈・他者の存在・自己形成－とその必要性について述べる。第３章では、研究方法について大きく４つに分けて述べる。まず3.1では、質的調査手法の先行研究を踏まえた上で、質的調査手法とはどのようなものかを検討する。そして、近代主義的人間観、すなわち個人主義的な能力観による研究手法が、どのように「学習動機」を捉え、そこにはどのような問題が存在するのかについて述べる。その上で、質的調査手法で学習動機を理解することの重要性と必要性を論じる。また3.2では、社会的文脈との相互作用や、自己形成と学習動機との関連を捉えるには、語りや物語の概念が重要であるという論点から、社会的文脈や自己形成と深く関わっている学習動機を理解するための概念として、物語の重要性及び必要性について述べる。そして、3.3では、ライフストーリー・インタビューについて検討し、学習動機を理解するために、なぜ、ライフストーリー・インタビューを用いるかについて述べる。さらに3.4では、実際の調査方法や分析方法を提示する。第４章では、学習者の語り及び、収集した２次資料に基づいて、学習者たちを取り巻く社会的状況を提示する。具体的には台湾の高等教育やそれらに関する周辺の状況、台湾の日本語学習に関する社会的状況－「哈日風（ハーズーフォン）」、「大学入学制度」、「語学重視の社会」、「ライセンス重視の社会」－などを論ずる。なお、本研究でいう社会的文脈とは、歴史的・文化的意味を持つ状況に対する学習者自身による個人的な解釈を、社会的状況とは、歴史的・文化的意味を持つ状況、つまり、人間が生きているその社会の制度や習慣を指す。社会的状況は、その社会に生きている人間であれば、誰から見ても否定できない事柄であり、そ

れらの社会的状況はその社会に生きる人間の行動や意識に影響を与えているものである。第５章では、社会的文脈や他者との相互作用を通して、個々の学習者が日本語学習動機を如何に形成し、そして変容させていくかというプロセスを、日本語学習経験のナラティブ分析を通して明らかにしていく。第６章では、５章の学習者のナラティブから、共通している社会的文脈や他者をピックアップして、その上で、6.1 では各々の社会的文脈と自己形成との関連から、6.2 では対話する個々の他者と自己形成との関連から、それぞれの学習者の学習動機形成や変化、そして学習行動との関わりについて分析・考察を行う。6.3 では学習者の自己形成を類型化し、それぞれ類型化された自己形成と日本語学習との関連を検討する。そして 6.4 では、５章の個々の学習者の日本語学習経験のナラティブ分析と、6.1～6.3 の３つの視点の個々の分析を合わせて、学習者の学習動機を総合的に捉え、類型化していき、最後にどのような類型の学習者の学習動機が積極的に学習と関わっているかを明らかにする。第７章は終章とし、7.1 では、本研究のまとめとして、本研究の調査結果及びそこから得られる示唆について論じる。そして 7.2 では、本研究の研究手法は質的調査のため、結果の提示が文字による「厚い記述」となった理由や、従来の数式による研究と同様の視点での妥当性や信頼性などの検証では、無理が生じてくると考える点について述べる。その上で、質的調査をとった本研究の妥当性や信頼性について一体どのように考え、評価されるべきかについて論じる。さらに 7.3 では、本研究で残された課題を提示し、論文を終えることとした。

また、本論文の研究結果を述べる前に、まず、本研究の結果を検証する際に用いる基準、つまり、本研究を評価する際に取り上げられる妥当性・信頼性・一般化の可能性について論じておきたい。従来、研究においての妥当性とは調査の結果は実際の日常世界・現実世界に即しているかという意味であり、信頼性とは、同じ調査対象（調査協力者）に対して、同じ調査方法で調査を何回行っても、その結果は同一、もしくは同等の結果を導き出すか否かということであった。つまり、妥当性においても、信頼性においても、調査対象が安定しており、客観的な真値が存在していることを前提とし、それに合致するか否かで評価されている。しかし、質的調査手法による研究においては、社会的文脈の中で生きるリアルな人間とその人間像を研究の対象とし、変化していくことが自然であるとしている。よって、従来の量的研究で考えられている妥当性や、信頼性の概念によって質的調査手法による研究を測定するのは不適切であり、質的調査手法による研究においては、データ収集や分析、考察方法の「透明性」、「依拠の可能性」、「一貫性」が重要であり、それらの視点より評価されるのが適切であると考えられる。よって、本研究は、できるだけ、調査のプロセスや分析のプロセスを詳細に提示することとした（第５章、付録１、付録２を参照）。もう１つ、質的調査手法を用いた研究において頻繁に取り上げられる問題点としては、一般化の可能性や代表性がある。量的調査手法の視点から評価した場合、質的調査における調査協力者の数が少ないため、代表的なサンプルを網羅していない可能性があると指摘されるのである。しかし、質的調査手法を用いた研究は、調査協力者（ケース）の内的なダイナミズムを理解することを目的としており、研究結果としてある経験が表出し、それがたとえ個人の専有的なものであっても、社会的に多くの人が同様の環境下におり、同様の経験をする可能性があるなら、潜在的に一般化されると考えられるのではないだろうか。なぜならば、個人各自の経験に関わらず、個人は社会的なものに属しており、常に影響を受けて変化しているからである。これらの観点から、質的調査においては、量的調査手法でいう一般性や代表性の概念に代わり、適用の可能性に着目すべきであって、量的調査手法と同様の視点で、ただ、漠然と一般化、代表化について問うことは不適切ではないかと考えられる。そして、研究結果で示された現象がそれを読む者の状況と「合致或いは類似するもの」であるか否かをまず判断した上で、その研究結果が自分たちの状況にどれくらい、どのように適用できるかを考える必要がある。なぜなら、以上述べてきたような質的研究における「妥当性」、「信頼性」、「一般化の可能性」が理解されなければ、調査結果の中に「合致したものや類似している現象」が見出された際に、「そんなことは調査しなくても、分っていることである」と安易に結論を下されてしまう恐れがあるためである。質的調査の目的は、特定・特別な調査協力者（ケース）の経験の表出だけではなく、また、常にほかのあらゆる状況への適用を目的としているものでもなく、あくまでも適用の可能性という一般化を目指しているのである。本研究のプロセスも、これらの基準に基づいて行っている。

最後に本論文の研究結果を述べる。台湾の大学における日本語学習者の日本語学習動機の生成と変化には、自己を取り巻く社会的文脈への認識と、その文脈における自己形成とが深く関わっていることが分かった。つまり、学習者が常に、自己を取り巻く複数の社会的文脈を同時に認識し、それらの社会的文脈のもとで自己像を維持・形成、或い

は統合させながら、自己にとっての学習の意義を見出し、それに応じてより多様な学習行動を行っているのである。また、ある時点毎に、日本語学習に関する社会的文脈をより多く認識し、それらとの相互作用により、自己像を形成・再形成・統合し、その時点の自己にとっての学習意味を見出すことにより、より確かな学習動機が生成、或いは維持され、自分自身が満足できる学習成果に到達すべく学習行動を行うのである。したがって、学習者に自己を取り巻く社会的文脈を常に認識させ、時間軸に沿った学習者の自己像と、その自己像との一貫性や連続性の形成を手助けすることができれば、学習者の日本語学習に有益であると考えられる。これらの結果から、教師や先輩を始めとする学習者の周囲に存在する他者は、学習者にとって単なる知識の伝授者ではなく、学習者に常に現在の自己を認識させ、自己を取り巻く社会的文脈とはどのようなものであるかを的確に伝える重要な役割を担っていることが判明した。学習者はその助けを借りながら、自己を取り巻く社会的文脈と、現在・将来の自己像を結合させて、日本語学習動機を形成・維持し、高めていくのであろう。以上は、本研究の概要説明である。

論文審査の結果の要旨

本論文は、台湾の高等教育における日本語学習者を対象に質的調査を実施し、第二言語学習の動機とその変容に関する研究を行うものである。研究の手法としては、先行研究を渉猟しその長短を踏まえたうえで、膨大な質的データを収集してライフストーリーを再成し、分析手続きの客観性を担保して綿密に分析を行い、実証研究を有機的に展開することにより、学習動機の生成から学習行動へと至るプロセスを動的かつ流動的に捉えている。

本論文は、台湾の日本語学習者を調査対象として第二言語学習研究における独自の分野を拓き、ライフストーリー化の過程における調査協力者との相互行為を通して透明性や妥当性を高めつつ質的研究を行い、さらには研究結果を教育現場に還元すべく興味深い示唆を行うなど、新しい観点から学習動機研究を展開している。極めて厚い記述に加え、第二言語学習者の自己形成の一貫性・連続性に焦点を合わせ、社会的文脈とりわけ他者の存在と自己形成との相互作用という多角的かつ流動的な視点から分析を行うことにより、学習動機の変容および学習行動との関係における心的ダイナミズムを捉えた点は、高く評価される。社会文化的な存在として学習者の視点を重視する視座は本論文の特色であるが、欲を言えば、人間の諸活動と人格形成との関連についてもより深い洞察が望まれるところであろう。しかしながら、これはむしろ今後の研究の展開に期すべきものとして位置づけられる。

以上のように、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分価値あるものと認める。